自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制 | 教学委員会

（責任者名）手塚一郎
（役職名）学長（兼・教学部長）

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点		自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点		
	プログラムの履修・修得状況	本プログラムは令和7年度入学生より1年次の必修科目として教育課程に組み込まれており、令和7年度のプログラム対象科目である「情報リテラシー」においては、履修者数164名、修得者数124名、単位修得率は76%となった。年次進行に伴い全学生が順次履修するため、全学履修率は令和7年度の22%から、令和8年度50%、令和9年度75%と段階的に向上し、令和10年度以降には100%に到達する見込みである。
	学修成果	令和7年度の本プログラム履修者164名の成績分布は、S評価17%、A評価17%、B評価18%、C評価23%であり、単位修得者は124名、単位修得率は76%であった。S・A・B評価の上位層が計86名（52%）と過半数を占め、プログラムの到達目標を高い水準で達成している学生が多いことが確認できる。一方で、D評価3%、E評価2%に加えてF評価19%が存在しており、受講継続や学修意欲の向上に向けた支援の充実が今後の課題となっている。
	学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	令和7年度のプログラム対象科目である「情報リテラシー」の授業アンケートにおいて、全クラスの5点満点中の平均値として、教材の有用性（4.31）、シラバスへの準拠（4.30）、授業内容の理解度・スキル向上（4.20）をはじめ、多くの項目で4点以上の高い評価が得られた。全体として授業の質および学生の理解度は良好な水準にあると判断される。一方、授業の進行速度（3.51）については、「やや速い」と感じる学生も一定数いることから、今後は説明の区切り方や補足資料の活用等により、理解を一層促進する工夫が必要である。引き続きアンケート結果を授業改善に反映させていく。
	学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	授業の質向上を目的として、毎年度「授業改善のためのアンケート」を実施している。アンケート結果をもとに、担当教員は授業の良好な点や改善点、学生の学修状況を踏まえた次年度の改善計画を整理し、一覧として取りまとめている。これらの結果は教職員および学生に共有しており、図書館でも閲覧可能としている。こうした仕組みにより、授業改善の状況を可視化し、在学生および後輩学生への有用な情報提供を行っている。
	全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	本プログラムは1年次必修科目として教育課程に体系的に位置付けられており、年次進行に伴い全学生が順次履修する仕組みとなっている。令和7年度の履修率は22%であるが、令和8年度50%、令和9年度75%と段階的に向上し、令和10年度以降には100%に到達する計画である。また、履修状況については教務データにより継続的に把握し、必要に応じて適切な改善を行う体制を整備している。

自己点検・評価の視点		自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点		
	教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	本プログラムは令和7年度入学生より開始されたため、現時点では卒業生は在籍しておらず、修了者の進路・活躍状況および企業等からの評価を把握できる段階にない。今後、学生が卒業する時期に合わせて、進路追跡調査等を通じ、本プログラムで培った数理・データサイエンス・AIに関するリテラシーが実社会においてどのように活かされているかを継続的に把握・評価していく予定である。
	産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	本プログラムは令和7年度に開始されたため、現時点では産業界からの直接的な意見は得られていない。しかし、数理・データサイエンス・AIの基礎素養を全学生が身につけることは、産業界からも重要視されている。今後はキャリアセンター等を通じて関係者の意見を収集し、教育内容・手法の継続的な見直しを行うことで、社会的要請に応じた教育の充実を図る予定である。
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること		本プログラムでは、オープンデータを用いたデータ分析演習を通じて、学生自らがデータを扱い、可視化や分析を行うことで、学ぶことの楽しさを体感できるようにしている。また、生成AIの仕組みや利活用、情報セキュリティや著作権といった内容を扱うことで、これらの知識が現代社会において不可欠であることを理解させ、学ぶ意義を明確にし、主体的な学修意欲の喚起につなげている。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること ※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載		本プログラムでは、毎年度実施する授業アンケートおよび授業改善アンケートの結果を担当教員がフィードバックとして取りまとめ、次年度の授業内容・教授方法の改善に反映させている。また、データサイエンスやAI技術の急速な進展に対応するため、シラバスの内容を定期的に見直し、最新の技術動向や社会的ニーズを踏まえた教育内容の更新を継続的に行っている。これらの取り組みを通じて、学生にとって常に実践的かつ有益な教育プログラムとなるよう、PDCAサイクルに基づく継続的な改善を図っていく。